

ご挨拶—— a b i r e という語

廣川 和子

2019年の暮、主のいなくなった書齋を掃除していた時のことです。机の上にあった住所録を何気なく手に取って、表紙の裏に見慣れない語句が書きつけてあるのを見つけました。どうやらラテン語のようです。“abire non abire”そしてその下にもう一行、“abire non abire”全く同じ語句です。これは一体どういうこと？と思ってよく見ると、各行の横に小さな字で意味らしきものが書いてあります。一行目の横には「あの世に行くのではなく、立ち去るのだ、心を残して。つくばを去るとき、2000年春」とあり、二行目の横にはこうありました。「そして今、立ち去るのではなくあの世へ行くのだ。でも寂しくではなく、楽しく。2015年春」2015年はお医者様から、血液検査に異常値が出たから精密検査を受けるようにと言われた年です。主人がこの時ははっきりと死を覚悟したということが、この書きつけからみて取れます。その一方で、「今やりかけの仕事があるから、それが完成するまでは入院となるかも知れない検査は受けない」と宣言し、主人の書齋にいる時間は一段と長くなりました。二年後、救急車で運ばれ、末期のガンを告げられた時も、府内一と評判の手術の腕をお持ちの先生に手術をお断りし、在宅可能な治療法とできる限り体力を落とさない薬の選択をお願いしておりました。全てを理解して下さった先生や介護の方々の優れた対処のお陰で、その後さらに二年半の時を得て最後の本を書き終えた主人は、2019年の秋の初め、再び救急車で運ばれましたが、私にとってそれまでの間は、「善く生きる」ということの意味を考えさせられる毎日でした。そして、今度は大人しい入院患者となった主人は、二ヶ月後、あの書きつけの言葉どおり、楽しく笑っているかのような顔で静かにこの世を立ち去り—abire—ました。お医者様にとっては、「困った患者」の典型なのでしょう、と申し訳なく思いましたが、これが、多くの人の生き様を見てきた主人の選んだ「自分の望む生き方(逝き方)」だったのでしょう。殆んど出なくなっていた声をしぼり出すようにして言った最後の言葉が、「満足して…」でしたから。

お世話になりました恩師や同僚の先生方、出版社や病院スタッフの方々、共に学んで下さった多くの学生の皆さま、また直接間接に関わりをもって下さいました全ての方々に深く感謝し、故人に代りましてここに心からのお礼を申し上げたいと存じます。皆様本当にありがとうございました。